

● 12月選評

小島なお

あえて裸眼

ルノワールの絵に住みたいし

...

氷丸

ルノワールの絵のなかの人々は幸福に見える。いつか自分も加わるためには、世界の解像度を上げてはいけない。もっと淡く、光に目を細めていなければ。

神保町が

からだのなかにあつたなら

もつとよい羽布団をかぶる

...

汐見りら

からだに陳列される貴重な古書の数々。その背表紙を撫でる本を愛する人たちの眼差しとカレーの香り。失いたくない風景を上質な羽布団でくるんで守る。

シャーベット・ソーダ

を先に眠らせ

朕も寝る冷凍庫すこやかに

...

羊夏生

かつて天皇の一人称として用いられていた「朕」。シャーベットのように入凍庫で凍結され生きながら永久に眠る天皇は「象徴」というありかたの寓喩か。

一編のレポートだけでも繋がれば

彼に託しすぎて春雪崩

...

洋梨 またら

「繋がる」とは、良い方向や結果に「結びつく」の意味だろうか。相手に縋るような希求の切実が、雪解けの春の雪崩れを引き起こす危うい前兆として。

真似すれば鴉に私に喉がある

高田皓輔

声を真似るのは身体を擬態させることである。鴉の声を発そうと筋肉を引き絞るとき、自分の喉が声を発する器官であると鴉の喉を通じて体感される。

昼は手を夜は胸部を示すから
朝はわたしたちのものだった

高遠みかみ

いちにちの時間に肉体が宛がわれるとしたら。昼は忙しく器用にひらめく手、夜は深淵の底深く広がる胸。朝の「わたしたち」は魂のようなものだろうか。

閏年を生んだ使徒だねゆっくりと

非鋭理反

四年に一度の閏年にやってくる使徒。使徒は神から使わされた者だが、「ゆっくりと」の副詞の映像性からはエヴァンゲリオンの使徒の駆動体を想像させる。

悪びれない訓練中の十二月
何でも入れて良いお鍋だよ

ニイナ

擬人化されている十二月は、まだ十二月であることに慣れずあっけらかんと爛漫そうだ。明るい闇鍋への誘い文句に悪びれなさを感じて怯む。

ライカどくだみを見て

ライカ目をつむるようにあらゆる

さいわいを

：

ちねんひなた

ライカはカメラだろうか。あるいはスプートニクに乗船した犬の名前だろうか。
見ることの幸いと見ないことの幸い。いずれが大きいかいまだわからない。

コンタクトの上から

眼鏡をかけるのも

季節を忘れる練習なのか

：

雪永雪道

花粉対策なのだろう。やがて人は四季に適応できなくなるのかもしれない。この
ちいさな日々の積み重ねは季節への愛着を忘却するための練習とも言える。